

富士信仰の多様な姿 修験の伝統を受け継ぐ

円楽寺は富士山の北西に広がる甲府盆地の南端に位置しています。この寺は修験道の開祖である役行者によって創建されたと伝えられています。役行者の人物伝は著しく神話化されているものの、『続日本紀』という年代記には、彼が 699 年に伊豆半島沖に浮かぶ伊豆大島へと流された記録が残っています。伝承によると、役行者は毎晩、歩いて海上を渡り、富士山へ登ったとされます。

円楽寺は吉田口登山道二合目に宿泊所と礼拝所を兼ねたお堂（御室）を所管しており、このお堂はその後数世紀後にわたって修験者たちに利用されました。県指定文化財である円楽寺の役行者像は、もともとは登山の季節に御室に安置されていた可能性があります。

かつて、円楽寺は毎年 4 月 15 日に「藤切」と呼ばれる行事を執り行っていました。この行事では、柴で覆われ藤蔓でできた 28 本の輪がかけられた高さ 8.5m の木の塔に一人の行者が登り、一番高い位置にある輪を切り落としました。これによってその年の修行シーズン開始が正式に宣告されました。藤切は富士山での修行を模したものなのかもしれません。

今でも、甲府盆地の東端にある大善寺で非常によく似た行事が開催されています。